

口琴が繋ぐ阿寒と世界

郷右近富貴子

2024年9月26日

聞き手：谷地田未緒、笹村律子（前半）

構成：谷地田未緒

——：富貴子さんはこれまでパフォーマーとして、工芸家として、あるいはレストランのオーナーとして活動されてきましたが、最近ウタサ祭りではプロデューサーとしての役割もされていますね。まず、最初のころからお伺いしたいのですが、自分のコミュニティの人ではない、外の人に向けて芸能を披露するようになったのはいつ頃からですか？

郷右近：阿寒アイヌ民族文化保存会で地方公演などがあると、地方のお客さんがみたり聞いたりしている中で子供ながらに踊るというのはありましたね。小学生くらいかな。保存会自体は物心がつくつかつかないかの頃からちょろちょろしていて、親が練習しているのをみてたり邪魔したり、私もやると言ってみたり。

——：最初に覚える演目はどんな物ですか？

郷右近：鶴の踊り、フツレチュイ、狐の踊り、ロホンナとか…。幼少期はそんな感じですけど、働けるような歳になってからは、アイヌ以外の一般の人に向けてというのは、コタンのオンネチセでパートとして働きながら踊ってもしました。阿寒湖アイヌシアターイコロが完成したのは私が結婚したあとくらいなので、それまで踊りはずっとオンネチセでした。ちょっと欠員がでたら「この日でれる？」と言われるような。それが19から23歳の時かな。

——：富貴子さんは阿寒湖を出て生活していた時期もあるんですか？

郷右近：大阪にいました。自分なりに10年くらいいたような気がしたけど、振り返ると1年くらいでした。戻ってからは、踊りは呼ばれたらしょっちゅう行っていました。その後2007年頃に、観光汽船のガイドもはじめたんです。これはただのガイドではなくて、早朝1便、6時発の汽船にだけ乗るもので、「アイヌの語り部船」というのがあって、千家盛雄さんが声をかけて

くれて始めました。アイヌガイドとしては一人だけで、ウポポを唄ったり、伝説を語ったり、ムックリやトンコリを演奏したりという語り部の仕事をやりました。これは私の修行時代というか、良い経験になりました。私と、叔父である千家盛雄さんと、3日おき交代ぐらいの頻度で、コロナ禍で事業が終わる2020年までやったので、10年以上。すごくやりがいのある仕事でした。船自体は朝6時に出て7時に帰ってくるので、自分が何かをしているのはトータルで30分くらい。状況に合わせて考えているので、ずっと話したり演奏したりしているわけではないけども。お客さんは、語り部がいることを前提として乗ってくる人と、何も知らずにたまたま乗ってくる方がいる。多い時で200人、少ない時だと一桁で、日によってもばらばら。人前に出ているのは他に誰もいなくて、自分一人だから、船の出航の案内などもやるけれど、お客さんの反応と、天気と、景色の見え具合に応じて、例えば霧が出ているから霧の唄を唄おうとか、季節によってヨシが色付いているから「ああ今日はヨシの唄だな」とか、波が立っていれば「遠くに白く見えているのは波ですけど、昔のアイヌはカイクマといって、それはうさぎのことなんですよ」とか、そういう話を繋げながら、いかにお客さんがアイヌの唄の世界を感じて、景色とマッチして楽しんでもらえるのかを考えていた。自然の情景に合わせて、ムックリ、トンコリ、唄も。お客さんの反応が直に見えるので、2階に行ってしまったお客さんが降りてきたりすると、よし、何かやろうかなとか。反応がダイレクトなので、それがとてもやりがいがありました。修行でした。また綺麗なんですよ、朝が。本当に「神様タイム」で。7時に帰ってくるともう「人間タイム」なんだけど、6時から7時のその一瞬の時間だけが、静寂で、別次元。贅沢だった。ツアー客向けのものだったので、コロナが流行った年になくなってしまった。いつの日かまた乗船できたら嬉しいです。

——：船が舞台だったんですね。

郷右近：しかも自然の中にある船上の舞台で、贅沢な時間でした。

——：プログラムを自分で考えて調整するというのも、プロデューサー的なスキルですね。

郷右近：そうですね、そういう意味でも鍛えられました。

——：大人になってから、下倉絵美さんと「カピウ&アパッポ」を結成して活動されていますね。

郷右近：2011年からですね。震災がきっかけになって始まったので。ドキュメンタリー映画¹⁾にもなったんですが、その映画自体が「カピウ&アパッポ」の結成の頃に撮影していたものです。

——：「カピウ&アパッポ」としてやった公演で、印象に残っているものはありますか？

郷右近：共演したみなさんそれぞれに素晴らしいし、尊敬するし、素敵なお人ばかりですけど……。例えば姉（下倉絵美さん）が出演していた「Hybrid」という作品を手掛けていた平山素子さんというダンサーの方の公演に声をかけていただき、出演させていただいたことがあります。キプロス島という地中海の島が会場で、スペインのサン・セバスチャンで練習と打ち合わせを3-4日しました。「HYBRID*k」という作品²⁾で、日本のコンテンポラリーダンサー3名、サン・セバスチャンのOREKA TXという、バスク地方の伝統音楽のグループとアイヌが出演しました。kは「コックリ」のことで、もののけとそこに迷い込んだ女性の物語。不思議で妖艶で、この世とあの世の境目なのか、夢か現実なのかかわからないような世界観。OREKA TXの音楽とアイヌのウポボ、コンテンポラリーダンスで表現していくんですけど、アイヌのウポボがOREKA TXの音に混ざり込んでいくことで、不思議な世界が生まれて。ただアイヌの唄を唄うんじゃないくて、OREKA TXの音楽にとけこませていく感じ。現地へ行く前にOREKA TXの曲の候補を姉と二人で聞きながら、平山素子さんのイメージを共有するという作業もしていました。その場面の曲と世界観に合うウポボを探しては唄ってみる。OREKA TXの音楽の中には独特な拍数の曲も多いので、ウポボの拍数をひとつ増やしたり減らしたり、イメージを共有したりしながら、素子さんの作品の世界観を共に作っていく。クリエイションをする素晴らしさと楽しさを知るきっかけになりました。

——：それは日本では発表されていない公演ですね。

見て見たかったです。

郷右近：高木正勝さんのプロジェクトは、「山咲み（やまえみ）」という作品で、姉が共演していて、規模が大きくなった「大山咲み（おおやまえみ）」というコンサートに私も参加させてもらったんです³⁾。これも高木さんの音楽の世界にウポボを乗せていくんだけど、それまでで一番大きなステージに立ったのが「大山咲み」だったかもしれない。その頃はまだ、アイヌの唄を唄う時、回数を決めたり踊りに合わせたり……というアイヌの世界観の中でだけ唄って来ただけで、高木さんをはじめ様々な演奏家の奏でる音楽の中でウポボを唄う者としてともに出演させてもらって、「アイヌ音楽の世界観」の枠を飛び出すきっかけになった。皆の奏でる「音の中にみんなと共に混ざって、奏でて唄うということが、こんなに楽しいの！」ということを初体験した。最高に楽しかった。

——：それまでの公演と決定的に違ったのは为什么呢。

郷右近：やっぱり高木さんのスタンスが、「そのままでもいいよ」というところだったからかな。「僕たちはこうやっているから、乗れるところで乗って、声出せるところを出して、そのまんまでいいから」という。でも、「そのまんまって何」となった。実はすごく難しい。オーケストラのような人数がいる中で、「じゃあ次はこの曲やります」という感じでリハが進んでいくけれど、その波に全然乗れず、あ、ああっていう感じで。姉はもともと共演していたから、音楽の波に乗っていて……。私は自分だけがその波に乗れず、ドボドボドボって沈んでいく感じ。すごく美しい音楽が流れているけど、乗れなくて苦しくて、どうしたらいいんだとリハーサル中は苦しんでいたんですけど、その中でも感覚は少しずつ掴んでいたらしくて、本番幕が開いた時に、「うわ、なんか楽しい！」となった。「ああ、これか！」と。音楽の中に自分も居ることができているという感覚。

——：「ウタサ祭り」のようなご自身が企画側にかかわったイベントにも、こういう経験って役に立っていると思いますか？

郷右近：ものすごく。逆にいうとそれがなかったらできなかったと思う。

——：「ウタサ祭り」に関わる前に、出演者ではなく制作側（演出とかプロデュースとか）として、中身をコントロールできる立場として関わったことはありましたか？

郷右近：明確に「あなたがその立場でコントロールしてください」というふうに関わったことはなかったと思う。でも例えば、口琴の会としてアイヌの音楽フェスティバルに出た時に、「この流れならこうしたほうがいいんじゃないか」とか、そういうことは言わせてもらったりした。一人が司会じゃなくて、今回は一人ずつ喋ることにしてみようよとか。そういうふうに提案したり、話したり考えたりしてしまうタイプではあった。

——：「ウタサ祭り」にはどんな経緯で関わることになったんですか？

郷右近：明確にディレクターという名目ではなかったけど、第一回の時から関わってはいて、当時クリエイティブディレクターとして入っていた方ともいろいろ話はしていた。それ以前に、もともと「阿寒湖でアーティスト呼んで自分たちでフェスをやりたい」という気持ちになっていた時に、音楽イベントを企画したらいいんじゃないかという話になって、それから。

——：「フェスをやりたい」と言っていたのはどなたですか？

郷右近：内輪の仲間です。ここのお店で集まって飲んでいるような。夫や姉も含めて。こんなことしたら楽しいよねとか、道東にはフェスがないよねとか、そういう話がだんだん大きくなっていった。

——：「ウタサ祭り」の初回はいつでしたか？

郷右近：コロナの感染が広まる直前、2020年の2月14日。湖上で、氷のステージ。寒いし、温めると溶けるし、湖の上だし、大変だった。その頃は制作周りはいあんまり関わってなくて、演出の方だけやっていたけど、「氷上の音楽フェスをやりたい」というイメージがみんなの中であって。

——：富貴子さんの役割は出演者側の調整ということでしょうか。

郷右近：出演する外部のアーティストは決まっていたので、そこは関わっていないけれど、「ウタサ」（互いに交わる）だから、なにか一緒にやることを考えないとねということで。コタンの人には

できるだけみんなに関わってほしいと思っていた。外部のアーティストは、相談はあったけど基本的にはお任せしていた。

——：外部のアーティストの方と一緒にやるというのはなかなか難しそうです。何年かあって仲良くなる前、最初の年には、どうやって誰と誰と一緒にやるかを考えたんですか？

郷右近：その年でいろいろですけど、1年目の時は開催の1ヶ月前くらいに、来れるアーティストに来てもらったんです。どういうアーティストで、どういう音楽をやるのかというのをコタンの人に聞いてもらって、コタン側も聞いてもらうという交流会をしました。「初めまして、マヒトゥ・ザ・ピーポー⁴⁾」みたいな感じで。GOMAさんというアーティストは、ディジュリドゥを演奏する人なのだけど、ちょうどその時に「イオンカ」という、エゾニウで作ったアイヌの楽器があったので、それを吹いてもらった。高橋邦幸さんやコムアイさん、青山翔太郎さんなど。高橋邦幸さんは「ロストカムイ」では関わっていたけど、コタンの人たちとはそんなにやり取りがなかったので、その時はすごく楽しかった。みんなの声を録音して、それをミックスして音楽にして、子供達はその辺に置いてあった鍵盤で遊んでいた音も、全部音楽にしていって。音が出るものが全部まとめて音楽になっていくのがとても楽しくて、昼間まずお話しして、少しずつ仲良くなって、夜に「邦幸さんの音を作るやつをやってみようか」というのでみんなで集まって、だんだん盛り上がり、みんなで踊ったりしました。外から来たアーティストの皆さんにもいろいろ聞かせてもらったけど、私たちもこういう踊りや歌があって、こういう意味ですよと、お互いに見せ合った。アーティストが事前に来たのは1年目ですけどね。

——：もともと何年かの計画で始まったということでしょうか？

郷右近：5年の計画だったんですけど、2024年は色々な事情で出来なかった。2020年（2019年度）が氷のステージ、2021年と22年はコロナ禍で観客が入れられず、シアターイコロでの映像配信だけをやって、2023年によりやく有観客で実施できました。

——：1年目を経てすぐにコロナになってしまいましたよね。2年目は実施自体が危ぶまれたんじゃないでしょうか。

郷右近：そうですね、でもオンラインにすると決めたことで、そういうやり方もあるんだと。

——：お客さんは見に来れなかったけれど、オンラインで拝見していた限り、出演者の皆様はいろいろ一緒にやっていて、楽しそうでした。

郷右近：楽しかったですよ。演者とといってもみんなコタンの人だから、コタンの人とアーティストと制作陣が、一緒に音楽で真剣に遊んでいるという感じ(笑)。オンラインになったことで、不特定多数の多くの皆さんにライブを見てもらえたこと、世界中の人たちにライブとして届けられたことがとても良かったです！

——：リハーサルはどんなふうに行ったのですか？場面転換など構成も考えられていましたし、コラボする楽曲など、かなり練習を重ねたんじゃないでしょうか。

郷右近：例えば青山さんとかは、自分で阿寒湖まで来てくださって、「アイヌウタサ」というアルバムを作ってくれました。それは青山さんご本人が作り込んだ感じ。きっちりパッケージとして作り込む感じの方だったので、どう「ウタサ」するかということで、青山さんの曲を流しながら、これに合うように鶴の舞をするにはどうしたらいいだろうかとみんなで相談した。ここで輪になるかとか、ここでしゃがんだら「そしたら私が見えないからもうちょっとこう斜めに！」とか。みんなで何度も集まって、「両サイドから出てくるようにしようか」「こっちのほうがいいんじゃないか」と。GOMAさんは本番の10日くらい前に来てくれていた。「阿寒口琴の会」とGOMAさんの組み合わせだった時は、いろいろな口琴を並べて見せていたら、「世界にはこんなに口琴ってあるんだね」「どんな音が出るの」と遊んでいるうちに、「ビョンビョンビョンビョン ビョンビョンビョヨン、これで行こう！」みたいなふうに演奏も決まっていた。それぞれのパートの中でどうするかは、一緒に打ち合わせていくうちに見つけていくみたいな感じ。最初にGEZANが来た時は、何を一緒にするかは全然決まっていなかったんです。曲も「東京」しか決まっていなくて。最初にコ

タンに来た時「ちょっとまずは聞いて」と。そしたらすごい音で、ドラムも歌も圧倒されて。どうしようかと思っていたら、ドラムのバチを2本叩くところがあって、それを見た渡辺かよさんが「あれってチュプカムイホー（月食の歌）の動きじゃないか」といって。もちろん彼らは彼らのスタイルでやっているだけなんですけど、似ていたのでそれを合わせてみたらバキッと合ったので、本番もそれでやりました。

——：外部からアーティストが来て、それとどうやって一緒にやろうかというアイディアは、コタンの皆さんの中から出てきている感じなんですね。

郷右近：そうですね。だから私がやっているのは、このアーティストには、この人とこの人ならいけそうだなとか、子供達とやりたいという人は、絡めるにはどうしたらいいかなと考えること。「ロホンナ」なら子供達は何人でも入れるなどと思って、それでメンバーを決めたり。この人とやるならこの人とこの人だけど、それだとこの曲になるから、その踊りならこっちの人たちも参加できる、とか。子供も一緒に出るためにこういうシーンを作ろうかなとか。馬追の踊りだとあの子に役目があるかなとか、みんながどうやったら関わられるかということを考えて構成します。参加したいという人は誰でも全員参加できるようにしていたので、それが実現するように考えるというか。

——：参加したいと思っていても参加できないこともありそうですね。

郷右近：そう思っている人もいると思う。もっと出たかったとか、自分もやりたかったとか。アイヌの音楽の可能性を探るというか、古式舞踊をそのままやるだけじゃなくて、アイヌ音楽の懐の深さとか、そういうものを実際に感じてまず一緒に楽しもうということを、みんなで共有したかった。ただどうしても、相手はプロなので、おおざっぱにぶつけるわけにもいかず、プロに対して本気で向かって同じ土俵に立てる表現にはしたかった。だからこそそのせめぎ合いが本当に難しかった。アイヌはまあこんなもんだ、というふうにはしなかった。同じ土俵でやれるんだよ、でもそのためにはプロ意識というか、本気でいかないとね、という。そのモチベー

ションを私自身も出る人たちも、どこまで上げられるかというのがすごく難しかったですね。今でも難しい。

——：参加したい人はみんな参加してほしいけど、プロとしての意識も落としたくないというバランスが、富貴子さんの演出の色なんだなと思いました。人によっては、本気でやりたい人だけついてきてくれればいいから、少数精鋭でいいという場合もありますよね。

郷右近：私は両方ですね。洗練されたすばらしい作品も作りたいけど、みんなで大団円でわーっとなるものも大好きだしやりたい。

——：話せる範囲でいいんですけど、マッチングがうまくいかなかったということはありましたか？

郷右近：コタンのメンバーが、阿寒に来たあるアーティストのファンで、一緒にやれたら嬉しいけどそんな個人的な希望は言えないと思っていた人がいて、それを汲み取ってあげられなかったことはあった。言ってくれば良かったなと。でも練習もあるし、こちらも組まなくちゃいけなかったから時間が取れる人にしてしまったんだけど、実はすごくやりたかったという。あとは、「もっと私がメインじゃなかったの」ということはあった。こちらは脇役なんて一人もないと思っているけど、自分もディレクターでありながら出演も多くて、減らしたいとは思っているけど、アーティストさんからリクエストされたりすることも多く、ディレクターに徹して、出るにしても自分の枠を誰かに委ねるということをもっともっとやっていかなければならなかったなあと。

——：ディレクターと呼ばれるようになったのはいつからだったのですか。

郷右近：2021年からかな。「え、私ディレクターなの、それなに？」というような。でもすでにその前年にも人を組みあわせるところをやっていたから、「そうじゃあそれ私の仕事か」というような。

——：すでにやっていた仕事に名前がついたということですね。

郷右近：そうですね、やりたいとかそういうことなく、なっていたというか。

——：この4年間の間で役割の変化とかはありましたか？何度も戻ってきてくれるアーティストさん

たちもいましたね。

郷右近：戻ってきてくれるアーティストたちは、もうコタンの一員みたいな。老若男女一緒に祭りをやっている中に、自分たちも混ざり込んでいるという感覚がすごく良かったみたいで、すごく阿寒湖を好きになってくれて、プライベートでも来たいといってくる人も多くて。そういう意味では本当にありがたいつながりをいただいたし、コタンという場所の温かさや表現力、懐の深さは、毎年やるごとに、新しくアーティストが来るごとに感じる。それと反比例したすごい寒さも！ギャップ萌えみたいな感じで、みんなそれが楽しいらしい。「やっぱり冬だよ」とかいって。そういう意味で繋がりとか可能性が出てきたり、「タデクイ」という下倉幹人たちのバンドも本当に恵まれて。ウタサで表現したことで、どこかにいったときに「ウタサ出てたよね」と言ってもらったり、ウタサに出てた人によくしてもらったりとか、そういうふうに広がってきていることがよかったなと思っています。

——：今後はもう「ウタサ祭り」はやらないんですか？

郷右近：やりたいんです。目標は自走すること。できれば交付金とか補助金なしで、ここのフェスとして定着させたい。でもそのハードルがすごく高く、一体何をどうしたらいいかなという状況。規模はぜんぜん小さくなるかもしれない。大きな予算でやってきたことなので、そこを指さずにできることからやってみようかという。これをずっと続けていきたいですね。

——：形は変わっても続くというのはすごいことですね。

郷右近：そうですね、やっぱりこの阿寒湖アイヌコタンの場所が、昔からアイヌだけじゃなくていろんな表現者とかアーティストの人たちがよく出入りしていて、そういう中でお互いに影響されていろんな音楽やイベントをオンネチセでもやってきた。そういう原点に「ユーカラ劇」があったり。阿寒は先人たちが既に新しい表現をやり続けてきた場所なので、アーティストの人たちが来やすい環境をずっと維持していきたいし、繋がった縁をこの先のコタンにとっていいものにしていきたい。

——：「ユーカラ座」とか、「イオマンテ劇」とか、人形

劇とか、阿寒がいろんなことを試してきているのをご覧になってきたと思うんですが、そうした舞台が今に影響していることってありますか？

郷右近：固定概念にとらわれなくなったというのはある。でもどんなことをするにしてもまず、基本がないとできない。アイヌの歌、踊り、楽器。基本があれば新しいものにも挑戦できるんじゃないかと。ここのコタンはいろいろな人が居るけど、アイヌの血が入っていてもいなくても、やっぱりアイヌプリというか、そういう心を持っていて、基礎的な唄踊りがある程度知っていてできて、その上でハイブリッドなこともやるっていうのが、このコタンの姿だと思うんですよね。根っこは大事にしようねというところは共通認識でみんなが持つべきところ。観光アイヌだってバカにされたりすることもあるけど、根っこがしっかりしていれば、何を言われてもしっかり立っていられる。

——：本当に大事なことです。次に、口琴についての取り組みについてお伺いさせてください。今年国際口琴大会を阿寒に招致する予定だとお伺いしました。

郷右近：そうなんです、もう先に「やる」と決めてしまっ。やれることをやる、という感じじゃないともうやれないと思って。

——：数年前、富貴子さんが口琴で国際大会に出られているのをオンラインで拝見しました。

郷右近：それは名人コンテストの方かな。「世界口琴名人」を決める大会が2022年にあって、オンラインで参加したんです。メイン会場は口琴のメッカ、サハ共和国のヤクーツク。だいたい10年に一回名人を決めるというので、10年前に9人選ばれていて、その10年後ということで開催された。審査には口琴に精通しているサハの著名な方々と、サハ国外の国際口琴協会のメンバーが入って、参加者は現地とオンラインで出たんです。私は別に名人になりたかったわけではなくて、弟子シギ子さんからずっとつながっているサハの口琴名人のおじいちゃんが居るんですけど、その人のソーシャルメディアで大会の情報を見て、その時ちょうどコロナ禍でどこにも行けず、ロシアとウクライナの戦争も始まったところだったから、音楽で垣根を超えてつ

ながり合えるっていいなと思ってね。一緒に演奏しようと思ったただけだったので、後で「名人コンテスト」だと知って遠慮したんだけど、でもその方、うちのおじいちゃんにもそっくりなんだけど、「出るためのサポートはするから富貴子は絶対出ろ！アイヌからも出てほしいから」と言ってくれて、それで出演したんです。

——：口琴大会に向けていろいろ計画は進んでいますか？

郷右近：機運が高まっているとは感じます。ムックリに関連するイベントが多くなりました。ウボボイや、釧路博物館とか、東京でもやっていて、オンラインで北海道からも参加する方とか。阿寒にはムックリや口琴を研究する人や演奏する人はよく来ますよ。

——：口琴大会を阿寒でやろうというのはどのような経緯だったのですか？

郷右近：初めて国際口琴大会に参加したのが、2011年にロシアのサハで行われた第7回の大会。そこで初めて世界中の口琴奏者の演奏を目の当たりにして、その時既に「絶対に日本でもやります！」と言っていたんです。10年後にやりたい、と。これは絶対北海道のみんなに聞いてほしいし、アイヌのウタリ達もここに参加してみんなで「ビョンビョン」やりたいと、そればかり言ってた。この時参加したのは私と、鈴木紀美代さん、千葉に住んでいる弓野恵子さん・正勝さん。それと東京のベウレ・ウタリの会の島田あけみさん。その後ハンガリーやドイツのタウハという町で開催されていたけど行けなかった。2022年にドイツ・ベルリンの第9回国際大会に参加して、次の日本開催が10回目になる予定。

——：何か国から何人くらい集まるんですか？

郷右近：まだ今打診しているところなんですけど、15から20カ国、総勢50名くらいを想定しています。演奏者と研究者。コンテストではなくコンサートの形式。まだ検討中ですけど、この人はみんなに聞いてほしいという方はシアターイコロのステージでやったり、野外ステージを作ったり、ワークショップもやりたいし、世界中の口琴が買える口琴マーケットもつくって垣根無くできたらいいと思っている。

——：大会というか、口琴フェスティバルですね。

郷右近：そうです。「大会」という名前なので何かを競う場に聞こえるのですが、フェスティバルです。出演者は国際口琴協会の推薦によって来るので、既に人選の検討を始めてくれています。皆さんそれぞれ助成金を探したりして、参加できるように画策しています。

——：どのような国から来るんですか？

郷右近：アジアとヨーロッパに大きく分かれていて、台湾、インド、インドネシア、フィリピン、ベトナム、それと中央アジアのキルギス、トゥバ共和国、アルタイ共和国。ヨーロッパはハンガリー、ドイツ、オーストリア、ノルウェー、リトアニアあたりかな。ロシアのサハ共和国は口琴のメッカだし、サハとの交流があって今につながっているの、来てもらえたらいいなと思っています。口琴って何がいいって、お手軽で小さくて、誰もが「ビヨン」となるところ。どんなにすごいパフォーマンスやステージをやっているというところがたまにいい。メロディにしようとする人は、指に口琴を五個くらいはさんで音階をつくったり、弁の長さがピストルみたいになっていて、音の高さを換えられる口琴を自作した方がいたりとか。そんなに頑張っただけで音階を作らなくてもと思わないこともないけど、本当にみんな試行錯誤していて、それがかっこいいし、面白い。言葉はなかなか通じないし、英語じゃない言葉もたくさんあるけど、とりあえずお互いに近づいていって「それはいいね」と言ってもらったり、こちらが「こうだよ、こうこう」と言っていると、向こうも「コウ？コウ？」と返してくれてお互いの言語のまま会話している。とにかく口琴が好きなことは共通しているし、結果的に音も同じだから、それがやっぱり楽しい。ムックリって、今でこそ注目もされてきているけど、昔は踊りと踊りの間に「ではここでムックリを聞いてください」という感じで、そこまで目立つようなものでもなかった。でも実はこれが世界とつながっているんだってところが、私がはまっているポイントです。アイヌのことをやっている人だったら大体誰でもムックリは吹けるはず。ムックリ自体も同じ楽器だけど、人の体を通すから人によって音も全然違って、その人自身がすごく

出るのもまた面白いところだと思う。お互い性格が丸出しになる。文化事業で集まるときに、「あ、この音はあの人かな」とわかるようになってくる。逆に「え、こんな新しいことやりだしたの？今の音どうやって出したの？」というようなやり取りもある。

——：ムックリの解説では、「このような口琴はユーラシア全土にあり…」などというのが定番ですが、本当に多くの人がやっているのですね。

郷右近：口琴大会に行くと、だいたい3日間朝から晩までずっと「ビヨンビヨン」なので、だんだんわけがわからなくなってくる(笑)。2022年のドイツの大会の時に一緒に行ったメンバーと、「ちょっとお茶に行かない？」といって一旦会場から逃れてきて休んでいたら、地下鉄に乗って会場に向かっている人が歩きながら「ビヨンビヨーン」と鳴らしているのがどこからともなく聞こえてきて、「ああやっぱりここにも居た」と(笑)。

——：それが阿寒の町で実現するかと思うと楽しみですね。

郷右近：町中で「ビヨンビヨン」になっているっていうね。そういうのが理想ですね。

——：富貴子さんにとって、口琴が大事な表現になってきたのはいつ頃ですか？「カピウとアパッポ」の映画でも、「他は苦手だから口琴だけやっていたらいいんじゃないか」と思い悩んでいるシーンがありました。

郷右近：ムックリにはまるきっかけは、弟子シギ子フチです。私がサハ共和国へ行く10年前、1991年に弟子シギ子さんが第2回口琴大会でサハ共和国に行っています。磯嶋恵美子さんと、今井ノリ子さんという3人のアイヌが参加して、その時サハの人たちとすごく仲良くなって、その後帰ってきてからも交流が続く中で、サハの方たちをこのコタンに呼んで演奏してもらったということがあった。その来日の時に初めて海外の口琴奏者の演奏を聴くことになって、「なんだこれ！」となった。私が中学校とか、高校に入るか入らないかくらいの年。それと、シギ子おばさんが「Mukkuri Hawehe」というCDに収録した「世界の川に捧げる」というすごく美しい曲があって、それをサハの人たちと一緒に釧路でコンサートをした時に聞いて、また「ズ

キューン」ってなった。その時はちょっと吹けるくらいで、もともとムックリは好きだったし、お店の前でお客さんに向けてちょっと「ビョンビョンビョン」ってやったりはしていたけど、そんなにハマるということもなく、まあ身近にある楽器という感じだった。それがシギ子おばさんの演奏を聞いて、倍音とか、3重4重の音を聞いて、「ムックリってすごい」と思った。「あの音はどうやって出しているんだろう」と思って、自分でも練習しだした。たまに踊りの手伝いにチセに行くと、マイクが使えるので、そこでいろんな音を出して練習したり。マイクを使うと自分の音が聞こえやすいからね。あと他の踊り手のおばさんたちの演奏を聞いたり、やり方を教えてもらったりしているうちに、はまっていった。そうしているうちに第3回国際口琴大会がオーストリアであって、その時に私の母や祖母、叔母、シギ子おばさんなどがみんなで行った。そのビデオを見せてもらったりして、国際的な交流ができるムックリっていいなあと思ったりして。だから国際口琴大会とのつながりはすべてシギ子おばさんから始まったんです。

——：阿寒口琴の会というのもできましたね。

郷右近：1991年にサハで口琴大会に参加した後、弟子シギ子さんとその仲間で翌年に作ったんです。今の主要メンバーは山本栄子さん、床みどりさん、渡辺かよさん、平良智子さん、姉の下倉絵美と私が主要メンバーで、呼ばれてどこかに出演するときにだけ参加してもらう人たちもいます。名前は「阿寒口琴の会」ですけど、きっかけが口琴だけで何でもやります（笑）。唄踊り、物語、ムックリ、トンコリ、何でも。やっぱりこのムックリという楽器がどんなに面白い楽器かをわかってもらうためには体感してもらうのが一番なので、国際口琴大会には、多くの人に来てほしいなと思います。

——：富貴子さんのおっしゃるような「ズキューン」とくる感じが広まるといいですね。

（了）

注

- 1) 『kapiw (カピウ) と apappo (アパッポ) アイヌの姉妹の物語』(佐藤隆之監督、2016年)
- 2) アーツカウンシル東京ウェブサイトにも同事業の詳細が掲載されている (<https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/what-we-do/support/program/29330/>)
- 3) このコンサートの様子はアーティスト本人のYou Tubeで公開されている。 <https://youtu.be/yQJL003y2o0?si=2I8HA7z27ZeN0yks>
- 4) オルタナティブロックバンド「GEZAN」のボーカル。